

第五回 朝鮮王朝

1. 国家改革と文化の発展

1388年、中国の明が鉄嶺（철령、江原道北部）以北を明の領土にすると高麗に通告したことにより、高麗朝廷は反明派と親明派に分かれた。当時、紅巾賊¹の撃退と倭寇討伐に功績を挙げた二人の武将、崔瑩（최영）と李成桂（이성계）が国家の名望を集めていたが、反明派の崔瑩は遼東地方への攻撃を主張し、李成桂は強大な明に勝てるはずが無いと出軍に反対した。結局、遼東攻撃は決定され、李成桂率いる軍隊は出撃したが、彼は鴨緑江の中州である威化島（위화도）で引き返し、そのまま開京を征圧した。

崔瑩が追放された後、新興士大夫は田制改革を進め、科田法（과전법）²を施行した。1392年、国王の恭讓王（공양왕）は李成桂に王位を譲り、こうして高麗から朝鮮へと王朝は代わることになった。

李成桂は朱子学（性理学）を国家の基本理念と定め、成均館（성균관）で儒学による官僚育成を図り、仏教勢力を排斥し、新興官僚である鄭道伝（정도전）、権近（권근）、趙浚（조준）たちを用い、新しい法律や礼制を整えていった。また首都を漢陽（今のソウル）に遷し、景福宮（경복궁）や崇礼門（숭례문、南大門）、宗廟（종묘）などを配置した新しい都が建設された。

第三代国王の太宗（태종、在位1400-1418）は政治体制を改革し、政務を六曹（吏曹、戸曹、礼曹、兵曹、刑曹、工曹）に分け、最高議決機関として議政府（의정부）を、司法機関として義禁府（의금부）を置いた。また、不正な政治を糾弾する司憲府（사헌부）・司諫院（사간원）を設け、国王の秘書役として承政院（승정원）を作った。

こうして朝鮮王朝は支配体制を確立させ、第四代国王世宗（세종、在位1418-1450）の時代に入ると、文化において大きな発展を遂げた。世宗は集賢殿（집현전）という官庁を作り、鄭麟趾（정인지）、成三問（성삼문）、徐居正（서거정）、申淑舟（신숙주）ら有能な文臣を集め、研究活動を行わせ、『高麗史』などの歴史書編纂事業を進めた。1443年には自らも研究活動に参加して新しい文字である『訓民正音』（훈민정음、ハングル）を制定した。また測雨計を作り全国で計測・記録を行わせたり、蔣栄実（장영실）を登用し、渾天儀（天球儀）、自撃漏（水時計）を作らせるなど、科学技術発展にも力を注いだ。

領土問題においても世宗は積極的に北方開拓に乗り出した。鴨緑江中流域に崔潤徳（최윤덕）を派遣し四郡を置き、豆満江流域に金宗瑞（김종서）を送り六鎮を設置させ女真族からの防衛拠点とした。朝鮮はこの時期、積極的に北方移民を進め、現在の咸鏡道一帯を開発し統治するようになった。

その後、クーデターによって政権を取った世祖（세조、在位1455-1468）は、王権を強化させ国家の安定を図り、やがて成宗（성종、在位1469-1494）の時代に国家体制を完成させ

¹ 元で起こった宗教反乱。紅布を頭に被り目印とした。高麗には1359年と1361年の二回はわたって侵入し、一時は首都である開京を占領した。

² 全国の土地を測量し、1391年施行した法律。この法律によって、畿内の土地は文武官僚などを中心に再配分され収租権を与えられ、畿外の私田はすべて国家の収租地である公田とされた。この法律によって地主と小作のそれぞれの権利が規定された。

ることになる。国家の法律を規定した『経国大典』（경국대전）、全国の地誌である『新增東国輿地勝覧』（신증동국여지승람）が刊行され、朝鮮は後世に至る国家の基礎を築き上げる。

この時期から、政治は科挙（官僚登用試験）によって選抜された官僚によって主導されるようになり、文班と武班の両班（양반）による支配体制が確立した。かつての高麗は貴族専政的な門閥官僚が王権を強く牽制していたが、朝鮮時代に入ると宰相や大臣の権限が弱まり、相対的に王権が強まった。儒学を基準にした政治規範を作り、教育制度や科挙制度を整え、官僚制度はさらに完成されたものとなった。

こうした社会の変化は文化や工芸にも影響を見せる。儒教の影響から簡素・質朴なものが尊ばれ、宮殿には自然美を生かした庭園が多く造られた。かつての女性的で貴族嗜好であった高麗青磁も、より実用的で洗練された白磁へと変わり、男性的なソンビ（선비、学者）の趣向が反映された。

2. 党争の始まり

体制が確立した後の朝廷は、建国に功績を挙げた功臣たちの子孫である勲旧派（훈구파）の勢力によって牛耳られるようになった。国王である成宗は勲旧派（훈구파）を牽制するため、士林派と呼ばれる新進官僚を大量登用した。士林派（사림파）は嶺南で朱子学研究を行っていた金宗直（김종직）の学統を引き、中央の政治改革を積極的に行う意思を持っていた。彼らは司諫院・司憲府に身を置き、国王に対する諫言や政治に対する糾弾を頻繁に行った。既得権益を持つ勲旧派と士林派との対立は増していった。

燕山君（연산군、在位1494-1506）の時代に入り、政治は大いに乱れた。燕山君は国王への批判を行う士林派を嫌い、後に士禍と呼ばれる二度にわたる大規模な弾圧（戊午士禍早오사화、甲子士禍갑자사화）を加え、多くの官僚が殺された。後に燕山君が追放され、次の中宗（중종、在位1506-1544）は政治改革を目指した趙光祖（조광조）を登用したが、まともや勲旧派によって弾圧（己卯士禍기묘사화）が加えられることとなった。

しかし、士林派は挫けず勢力を伸ばし、宣祖（선조、在位1567-1607）の時代に入ると朝廷内の実権を握るようになった。彼らは中小地主層の利害を代表し、言論を主導する役目を利用し、やがて勲旧派を排斥するだけの勢力を握った。その背景には地方に農莊を所有し、地方社会を支配していたことにあった。

こうして地方に基盤を持った士林派官僚が朝廷を主導するようになると、その学統の違いによって権力争いが始まった。この時期、性理学が大きく発展し、李滉（이황、退溪）、李珥（이이、栗谷）といった大学者が活躍したが、彼らの門人は性理学の論争によって対立し、政治においても党派を形成して争った。東人派と西人派、さらに東人派が南人派と北人派に分かれ、国政は混迷の一途をたどった。

折しも日本では豊臣秀吉が国内を統一し、大陸侵略への準備を整えていたが、権力争いに終始していた朝廷の官僚たちは、十分な対応を出来ていなかった。日本に送った二人の使臣は、西人派と南人派として対立し、一人は侵略の危機を主張し、もう一人は侵略の可能性は少なく軍備に回す金は無いと主張した。結局、朝廷は準備らしい準備も出来ないまま、翌年の侵略戦争を迎えることになった。

3. 日本・清の侵略

1592年、豊臣秀吉は明を征服する「唐入り」を妄想し、朝鮮への侵略を開始した。釜山に攻め寄せた秀吉軍は、一気に釜山、ソウル、平壤を陥落させ、朝鮮半島全土を蹂躪した。(壬辰倭乱임진왜란) 国王は国境である鴨緑江のほとりにある義州まで逃げ、王子二人が捕虜となった。

秀吉軍は水陸に軍隊を分け、朝鮮半島を北上していった。しかし、全羅左水使(全羅道東部の海軍司令官)であった李舜臣(이순신)は、侵略に備えて練兵を行い、食糧や艦船などの軍備を整えていた。彼は亀甲船(거북선)と呼ばれる突撃船を開発し、強力な大砲で秀吉の水軍を打ち破った。

こうして海路からの補給線が途絶えた秀吉軍は、陸地においても進撃することが出来なくなった。各地で義兵が起り、自発的に軍隊を編成した民衆は遊撃戦を行い、秀吉軍を苦しめた。紅衣将軍と呼ばれた慶尚道宜寧の郭再祐(곽재우)、平安道妙香山の僧軍将休静(휴정、西山大師)など多くの義兵将が活躍し、彼らは官軍と協力して晋州や幸州山城の戦いを勝利に導いた。また翌年になり朝鮮軍は明からの援軍と合流し平壤を奪還した。これによって秀吉軍は講和を余儀なくされた。1597年にも秀吉は再び侵略を試み、忠清道まで攻め上ったが朝鮮軍はこれを食い止め、海戦においても復讐した李舜臣が水軍を率いながらは負けることが無く、秀吉軍は敗走せざるを得なかった。(丁酉再乱정유재란)

しかし、この侵略の戦禍は朝鮮半島に大きな被害をもたらした。多くの人命が失われ、数万の人々が連れ去られて奴隷として転売された。また、優れた陶工が日本へと連れて行かれ、朝鮮の書物や貴重な文化財が持ち去られた。景福宮や慶州仏国寺は破壊され、それまで保管されていた歴史書の多くが失われた。この時、朝鮮の国家運営はほぼ麻痺状態に陥ってしまった。

朝廷は復興に向けて、様々な事業を行った。戦乱に際して疾病が流行ったことから、許浚(허준)に命じ『東医宝鑑』(동의보감)を編纂させ、医学発展に貢献した。また、土地と戸籍を調査し、再び国家運営を正常なものにする努力を行った。その頃、農民は軍役・田税・貢納³と言った負担に、生活を疲弊させていた。朝廷は農民の負担を減らすため、大同法(대동법)を施行し、貢納を米で納めるようにさせた。

一方同時期に、中国東北部では女真族が大きな勢力へと成長し、後金(清)⁴という国家を作り、明を攻撃し始めていた。朝鮮に対しても侵略の機会をうかがい、1627年に三万の兵で攻め込み、さらに1636年にも太宗ホンタイジが十万の兵を率いて攻め込んだ。(丁卯胡乱정묘호란・丙子胡乱병자호란) 清軍はソウルを陥落させ、仁祖(인조、在位1623-1648)は四十五日間の籠城の末に降伏した。朝鮮は清の要求を受け入れ、独立を保ったが、その

³ 当時の軍役は、実際に徴兵される者は少数で、大部分は綿布を納入し傭兵の経費を賄った。これにより軍役は実際上の人頭税へと変わった。また田税は土地の瘦肥に従って決められていた。貢納は地方の特産物を中央に納めるものだが、その地方で産出しなくなった物にも義務を負い、高額で代理人を雇い他地方から購入させることも多く、さらに中央まで運搬する義務を負い、農民にとってとても大きな負担となっていた。

⁴ ヌルハチが建てた女真族の国家。後の清。1616年に建国し、1636年に清と国号を改めた。1944年に北京へと遷都し、1912年まで中国を支配した。

後の清の干渉を免れ得なかった。

4. 英祖・正祖の中興

清へ人質として連れ去られた王子鳳林大君(봉림대군)は帰国後、孝宗(효종、在位1649-1659)として即位した。屈辱を雪ぐため、北伐論を唱えた強硬派の宋時烈(송시열)を登用し、軍隊を増強し、北伐の機会をうかがった。しかし、中国全土を征服した清の国勢は高まり続け、結局その夢は果たせなかった。

この頃、党争はさらに悪化し、趙大妃(孝宗の継母)の服喪期間を巡って肅正が行われるほどであった。西人派は老論と少論に分かれ、どちらかが権力を握るたびに敵対勢力を追放・処刑した。

英祖(영조、在位1724-1776)はこのような権力争いの弊害を無くすため、「蕩平」策を実施した。これは党派に拘らず、穏健で妥協的な人間を登用して、王権に従わせるものであった。更に党争の原因となっていた人事を改革し、両班たちの拠点となっていた私的な書院を禁止した。この事によって党争はしだいに治まりをみせた。

朝廷内の争いを治めた英祖は均役法(균역법)を実施し、役に関する税制を改革した。当時、戸籍操作が横行し両班を自称するものが増え、また、中央ではなく地方の役に就くものが多く、全体的な役額が減少していた。それを補充するため、死者や未成年者にまで役が課せられる事も多く、英祖はこの負担を半額に減らすように指示し、代わりに免税地への課税、隠し田の摘発、漁場や塩業、船舶からの税を移管するなどの対策を採った。しかし、これの後にも還穀⁵の問題が深刻化し、農民の負担は減らなかった。

正祖(정조、在位1777-1800)の時代に入っても、国政改革は続けられた。宮殿に圭章閣(규장각)と呼ばれる書庫を設け、ここで多くの若手官僚を育成し、改革のための大きな力とした。また正祖は王権が臣下によって振り回されないように強化されるべきだと考え、壮勇營(장용영)という親衛部隊を作った。この二つの機関によって正祖は自らの王権を安定させた。

1796年に完成した水原華城(수원화성)は、まさしく改革のための都市であった。丁若鏞(정약용)を登用し、当時の最新技術を用いて築城させ、新たな城郭都市を建設した。また、ここに商工人を誘致し、商業都市、軍事都市として育てていった。

しかし19世紀に入り、正祖の死後、改革の流れは途絶え、一転して国王は権勢家の操り人形となった。(勢道政治세도정치) 国政は王妃を出した外戚の一族によって運営され、安東金氏や豊壤趙氏などの有力両班家門が政権を独占した。1801年の天主教弾圧の際に、実学者を中心とした改革派官僚は追放され、丁若鏞もまた流罪に処された。ソウルを中心にした都市貴族の専政は、三政(田政・軍政・還政)による民衆への収奪を強化し、地方農民の怨嗟の聲が高まり続けた。1812年の洪景来の乱をはじめ、この時期に民衆蜂起が頻発し、やがてこの流れは、後の甲午農民戦争へと続いていくこととなる。

⁵ 本来、飢饉の際に農民に穀物を貸し付ける救荒策だが、壬辰倭乱以後、一割の利息収入が着目され、各官庁が農民に穀物を強制的に貸し付け、農民にとっては一種の税となった。

5. 実学の発達と社会の発展

16世紀、李滉と李珥を中心に発展した朝鮮性理学は、壬辰倭乱以後から停滞した。社会の急激な変動に対応できず、観念論に終始した論争は活力を失い、社会問題を解決する力を失ってしまった。

しかし、かつて党争に敗北し地方に追われた学統の内から、荒れ果てた農村を間近に見て、社会改革を志す人々が出てきた。17世紀に柳馨遠（유형원、磻溪）は『磻溪随録』（반계수록）を記して土地再配分の必要性を主張し、その影響を受けた李瀾（이익、星湖）は農家に永業田を持たせて土地の均等によって農村を再建するべきだとした。

また首都ソウルでも社会の進展を目指す人々が現れた。北学派と呼ばれる彼らは、清を通じて西洋の文物を学び、産業や商業の発展と科学技術の導入を考えた。朴趾源（박지원、燕巖）は、両班社会の矛盾を感じ、商業的農業の奨励、商工業の振興、貨幣流通の重要性、身分制度打破、清に倣った船や車、煉瓦の使用を唱えた。こういった朝鮮後期に現れた、旧来の学問に対して批判的な新しい学問の潮流を「実学」（실학）と呼ぶ。

歴史においても新しい志向が生まれた。李晬光（이수광、芝峰）の『芝峰類説』（지봉유설）では中国に対する事大主義の誤りを指摘し、古代の朝鮮の領土が満州に及んでいたことを考証した。柳得恭（유득공、冷齋など）は『渤海考』（발해고）において高麗時代の『三国史記』が渤海に関して記述しなかったことを批判し、自らの国の歴史として渤海を論じた。

文学では許筠（허균）が記したハングル小説『洪吉童伝』（홍길동전）が現れる。腐敗した両班政治と庶子差別の矛盾を鋭く指摘した彼は、優れた文人として一世を風靡しながら革命の思想を持ち、最後は反逆罪で処刑された。朝鮮中期以降、各地に建てられた書堂（서당）によって初等教育が普及し、ハングルを理解する人々が増えたため、従来の民話をもとにしたハングル小説が多く書かれた。春香（춘향）を救うため暗行御史（암행어사）の李夢竜（이몽룡）が悪政をさばく『春香伝』（춘향전）、沈清（심청）が盲目の父親のために身を捧げる孝子譚『沈清伝』（심청전）などはパンソリ⁶（판소리）として各地で演じられ、今でも人々に愛されている。

こうした学問や文化の新しい潮流には、社会の発展が背景にあった。戦乱の後、復興事業において行われた農村復旧は、水利施設を充実させ、18世紀には全国で6,000ヶ所の貯水池を備えた。また西海における干拓事業も進み、農耕地は大幅に増えた。

このことによって農法も発展し、南部を中心に二毛作が行われるようになった。畑でも^{うわ}種を植え付ける方法が開発され、一人あたりの可能耕作範囲は広がった。

商業も大いに発展した。綿作、タバコ、薬用人参などの商業作物が多く作られることにより、商品流通は盛んになり海外輸出が増えた。既に15世紀頃から地方でも場市（장시）や、定期市が多く開かれていたが、商品の増加によってソウル鍾路には、背に商品を背負った行商人である裸負商（보부상）が多数集まり、その露店があまりに多く、政府はそれ

⁶ 物語を唱（소리、歌）と白（아니리、台詞）で演じる民俗芸能。一名の唱者と一名の鼓手が演じ、唱者は科（발림、身ぶり）をもって緩急様々な節を歌い上げ、鼓手は鼓長短（북장단）を叩き、合いの手（추임새）を入れる。17～18世紀に形成され、各地で広대（광대）と呼ばれる芸人が仮面劇や人形劇とともに演じていた。朝鮮末期に申在孝（신재효）が12マダンに創作・整理した。

までの専売商人の特権を廃止せざるを得なくなった。このような商業の盛行は、鋸器や鋳物、紙などの大量生産を呼び、手工業の発展や鉱山開発を促した。